

## 司馬江漢の西遊をめぐって

宗田 一

一  
天明八年（一七八八）、四二歳の司馬江漢は西遊して長崎に一月余り滞在（十月十日～十一月十四日）、さらに足をのぼして平戸から生月島<sup>いきづき</sup>に渡り、捕鯨の実況を見聞した。

この生月島行は、大槻玄沢（茂質）の慇懃なるもので、玄沢の鯨に対する関心のあらわれであることは、玄沢の『西洋鯨品譯説附言』（文化五年稿）に詳しい。<sup>1)</sup>

この捕鯨をはじめとし、江漢が滞崎中に描いた吉雄耕牛像についても、のちに玄沢がかかわってくる。

### 二

大槻玄沢が鯨に関心をもつようになったのは、大坂の木村兼葭堂（孔恭、遜齋）の『一角纂考』に関与したのがきっかけである。

玄沢は天明五年（一七八五）、長崎遊学の途次、大坂の兼葭堂を訪れ、ここでグリーンランド地理志に載るウニコール（一角）の該当訳を依頼された。この翻訳成稿は、玄沢が長崎遊学を終えて江戸に帰った翌六年に江戸から兼葭堂に届けられた。この際、玄沢の旧稿『西産緒言』（のち小石元俊の意見で『六物新志』と改題）を右の書とセット刊行する約束ができ、

小石元俊の校訂を経て天明八年にセツトで刊行され、のち本屋ルートで市販された<sup>(2)</sup>。

玄沢は兼葭堂とのやりとりを、『西洋鯨品譯說附言』でも簡単に次のようにふれ、また小石元俊(有素)から平戸生月島の捕鯨家・益富氏の捕鯨談を聞き、一目見たいものだとも盾もたまたまなかったが機会がなく、後年司馬江漢の西遊に当たって生月島行を慫慂したのだった。

「茂質壯年遠西一角魚說ヲ譯シ、此魚(私注・海獸のこと)鯨魚ノ異種ニ係ル事ヲ知ル。往年西遊セシ時、浪速ノ兼葭堂主人ヲ訪ヒ、談次コノ事ニ及ブ。主人家藏ノ卧兒狼徳<sup>グルレラシド</sup>亜国志ヲ出シ示シテ、其一角魚說ノ譯ヲ乞フ。他日譯シテ此ヲ贈ル、一角纂考コレナリ。当時主人、本邦鯨品ヲ論ジ、紀州揖取某鯨志<sup>3</sup>ノ撰アレドモ、但未ダ其品類ヲ尽サズ云々ノ話アリ。且諸州捕鯨ノ略說ヲ聞ケリ。此ニ因テ始テ其概ヲ知り、我海出ス所ノ子久治良ナル者ハ一角魚ノ種族ナルカト云事ヲ得タリ。爾後諸書ヲ攷フルニ、己ニ貝原翁大和本草ニ曰、海鱈倭名イサナドリ古歌ニモヨメリ。昔ハクジラ、ヲ、モリ、ニテツカズ、弓ニテ射ル。日本ニテハ海鱈其品六種アリテ、其中大小アリ。慶長年中筑紫諸浦ノ漁人初テホコヲ以テツク中略月山叢談ニ捕巨鯨法アリ、本法等ニ詳ナリ云々。此等ノ類亦他ノ諸書ニモ載ルモノ多カルベシ。

天明六年ノ秋、京医小石有素(私注・元俊)余ガ材街ノ僑居ニ寓ス。有素嘗テ肥前平戸生月島捕鯨家益富某ナル者ヨリ診治ノ乞ヲ得、其郷ニ到リ数日陸留シテ其鯨漁ヲ縦觀セル事ヲ語ル。其魚形態ノ出群偉大怪異ナル、其漁事ノ極メテ盛ナル數百ノ漁子水夫及大小數船捕具調度尽ク完備シ、漁法ノ熟練絶技実ニ一壯觀タリ。其此ヲ網シ得テ後ノ功截割烹ノ手煉捷法ノ如キモ、其功妙目ヲ驚スニ堪タリト云。余コレヲ聞テ神飛ビ心馳セ、願クバ一日撃セン事ヲ欲スレドモ、今ニ於テハ絶テ其地ヲ踏ガタキ事ヲ憾ム。他日画工司馬氏西遊ノ挙アリ。余コレヲ慫慂シ便道平戸ニ過リ其漁ヲ一覽セヨト。コムニ於テ司馬氏益富カ宅ヲ訪ヒ親シク其漁ヲ見テ東帰シ、帰後其紀行中ニ圖說<sup>4</sup>ヲナセルモノアリ。」

これには、さらに玄沢の後日譚があり、江戸の平戸藩邸で藩医と鯨の話をしたり、生月島益富氏の同族の病気の診療に関与したりしていて知識を深めている。

「寛政丁巳（私注・九年、一七九七）ノ夏、茂質平戸侯ノ請ニ応ジ、其本邸ノ学舎ニ往来シ、其医員等ノ為ニ西洋内景医籍ヲ講会ス。会後其侍医芥川祥甫ト鯨話ニ及ブ事数次、彼輩其聞見スル所ヲ以テ告グ。故ニ一二紀聞スルモノアリ。又其後庚申（私注・十二年、一八〇〇）春、其藩士山縣<sup>5</sup>氏ニ之助其公事ヲ以テ江戸ニ来ル（生月島益富亦左衛門同族ナリ）一宿疾アリ、其夏治ヲ余ニ託ス。在留已ニ一年、診治往来ノ際屢々、捕鯨ノ話ニ及ビ、頗ル其詳ヲ得タリ。聞ニ隨テコレヲ手録シ、纏ノ芥川生ノ話説ト相併セテ一雜記ヲ草シ、姑ク名ケテ鯨漁叢話ト題セリ。……」

三

長崎滞在中、江漢は吉雄耕牛（幸作）像を数点描いている。「日記」天明八年（一七八八）十一月十二、三日の項に次のようにある。

「十二日。大風雨。此地の時雨なり。幸作の像を草草たる墨画にして、袴羽織にして坐し、手に蘭書を持ち、上に「エングエル（私注・天使）、ルーフ（私注・角笛）」を吹き居る図なり。是れは備中倉舖（私注・倉敷）と云ふ処の伯駒と云ふ医に贈る。……」

「十三日。時雨なり。石原休甫、外に一人、幸作の像を認め遣はず。皆皆謝銀を贈る。」

この記載だと、吉雄耕牛像は三点描いているらしい。天使像を上部に描いたものは現存していて、昭和三年十一月十六日の東京古典会の日録No四〇四に写真版で掲示されている。

他の二点もこの図柄と似たものであったらしく、大槻玄沢が文政六年（一八二三）より数年前に模写させた像は、天使像が上部にはないが、耕牛像の手にする蘭書に横文字が描かれていないだけで、同じ姿の画像である。

玄沢はこの模像について次のような識語を書いている。

「此肖像は翁の未だ勤務中写生せし真容と見えたり。或人の藏せるを請ひ模写せしめて常に展覽するに能く其面貌容儀

を模し得たり。此図に対すれば今又髣髴して新に其教を受くるが如し。当時都下にて翁に交接せし人は先師を初めまゐらせ皆既に泉路に趣き即今これを鑿定する者は茂質が輩のみなるべし。又幸に今年春三月其襲業の嗣子権之助永保(号如淵)和蘭貢進の料を齎し来りて面会す。即この図を出して示せしに善く其真を写せりと云ひき。如淵は翁の季子にして其齡六十二歳拳ぐる所なりと、故に幼名を六二郎と呼びたり。其職業を継ぎ厚く西学に長じ当時博洽明達一人なりと世に賞譽する所なり。能く家声を振ふと云ふべし。嗚呼數年にして翁の肖像を見その年又其息男如淵がこゝに來り会すること奇縁とや云ふべし。

文政六年癸未初夏 磐水老人大槻茂質時年六十七<sup>(6)</sup>

この玄沢の文からみると、玄沢はこの原画が江漢の作だったとは知らなかったらしい。

ところで、玄沢が耕牛像を模写せしめ右の識文を書いていることは、耕牛に敬意を払っている現われであろうが、玄沢が『重訂解体新書』の刊行に当たって、『解体新書』の耕牛の序文を訂正している態度と、どう関連しているのだろうか。

耕牛の訳書に『紅毛秘事記』があるが、その文意が不明のところから、玄沢が『和蘭水菓改譯』として、改訳している。この文の末尾に、「本書不分明ノ事多シトイヘドモ私カニ改譯ヲナス。原文ト参考シテ可ナリ。崎人ノ譯文多クハ此例ニテ毎ニヨミガタク解シガタキモノ多シ。故ニ強テ推シ譯シ改メ書シテ以テ問ニ応ズ<sup>(8)</sup>」とあり、門人らの質問にこたえて改訳したものらしい。

これと同じ事が、耕牛の右の訂正にもつながる玄沢の態度と見れば、玄沢にとって恐らく耕牛の原序文を改正することによって耕牛の文意をより生かすことができるとする好意からと見てよいのではなからうか。そう見ることによって、耕牛の画像を模写させてまで架蔵した玄沢の態度が理解できるのではあるまいか。

#### 四

江漢の前記「日記」には、十二日に「張仲圭<sup>(7)</sup>の像を認め、由良泰伯と云ふ医に遣はず。讚州の人にして長崎に住す。…」

とあり、張仲景の画像を描いたことが記録されている。

この画像が現存しているか否か未詳であるが、管見に入ったものに、「司馬峻描寫 S. Kookan」の落款があつて清人・倪景苑（天卿）が賛した絹本着色の張仲景画像がある。

洋風画ではないこの画像の出来は悪くはないが、江漢が同じ長崎滞在中に描いたと見られる関羽像の精緻な描写とはくらぶくもない。この方は落款に「東都江漢司馬峻拜手敬画」とあつて、横文字のサインなど勿論ない。恐らく、この張仲景像は、右の事情通が江漢の落款を加えた偽款といふべきだろう。

(注)

(1) 大槻玄沢『蘭畹摘芳』(稿、未刊)二編卷之八所収。文化戊辰(五年、一八〇八)秋八月碧水老夫述。

なお、吉田忠氏は、国会図書館・伊藤文庫の『西洋鯨品訳説附言』によつて、既にこの事を指摘している(吉田忠「大槻玄沢、玄幹父子の西遊と志筑忠雄」、『長崎談叢』第五十九輯、昭和五十一年六月)。

(2) 詳しくは、『江戸科学古典叢書32』『六物新志・稿/一角纂考・稿』(恒和出版、昭和五十五年刊)の拙稿解説参照。

なお、右の拙稿では、長崎遊学から江戸に帰った天明六年の時点での玄沢の堂号は「幽蘭堂」で、間もなく「芝蘭堂」に変えられたことを、右の稿本の記載によつて指摘しておいた。ただし、右拙稿中の玄沢の小伝で、建部亮作とともに杉田玄白門に入ったと誤記したので、拙稿「日本の医療文化史」(35)、ノイエ・インフオーマー一九八一年十一月号で訂正しておいた。玄沢の玄白入門は亮作より後の安永七年(一七七八)である。

(3) 紀州和歌山の棍取治右衛門『鯨志』一卷、宝暦十年(一七六〇)刊。本邦最初の刊行鯨書。

(4) 司馬江漢『西遊旅譚』(寛政六年、一七九四刊)

なお、江漢には「捕鯨図巻」(紙本淡彩)、「捕鯨図」(絹本油彩)の作品があり、両者とも(天明八年)十二月十五日の捕鯨の景を描いたと記すが、『江漢西遊日記』では十六日となっているので、この方が正しいのだろう。

ちなみに、江漢の銅版筆彩『地球全図』西半球図上部中央にウニョールが描かれている。この図と『芝蘭堂新元会図』の床間に掛けてあるウニョールの画幅の相似から、右の画も玄沢の影響によるものと思われる。玄沢がこの会を開催したのは、長崎での吉雄耕牛宅の「オランダ正月」の賀宴出席経験から、それを真似たものである事はいうまでもないが、寛政六年十一月十一日(一七

九五二月一日)を第一回としたことは、この年春に玄沢がオランダ人と最初の公式対談経験をもった感激と、蘭学の前途に対する輝かしい途の開かれたことへの玄沢の意識の表明と見るべきであろう(拙稿「日本の医療文化史」(37)、ノイエ・インフォーマー 九八二年一月号参照)。

(5) この山縣氏を『江漢西遊日記』に出てくる山形(縣)六良かも知れないと、吉田氏は前掲書で推定している。

なお、玄沢はその子・玄幹(茂楨)の西遊に際し、玄幹に生月島行を命じ捕鯨を實現しその記録を送れと依頼している事などに ついても、吉田氏前掲書を参照されたい。

(6) この画像と玄沢の識文の紹介は、大槻如電(修二)が「中外医事新報」第三百七十九号(明治二十九年一月五日号)四二〜四ページに行っていて、この模写された画像は大槻家に伝わっていた。現在、早稲田大学図書館蔵で、同館『洋学資料図録』(昭和四十三年)に写真がある。

(7) ツェンベリーが教えたワン・スウィーテンの水銀水を主体とした駆梅毒の訳書。架蔵本は桂川甫周門の時岡周伯自筆本(拙稿

「日本の医療文化史」(36)、メイエ・インフォーマー一九八一年十二月号、図2参照)。

(8) 大槻玄沢『蘭腕摘芳』(稿、未刊)初編卷之八所収。

(9) 関羽像(絹本着色、長崎・長照寺蔵)。

## On the trip to Nagasaki by Kokan Shiba

by

Hajime SODA

Kokan Shiba (1747-1818) who was one of founders of western style drawing in Japan travelled to Nagasaki and heard about the capture of a whale, this trip was made on the recommendation of Gentaku Otsuki, a famous scholar of Dutch Learning. This recommendation was made because

Gentaku Otsuki became interested in whales while studying “unicorn” (horn of narwhal i.e. western drugs).

During his stay in Nagasaki Kokan painted portraits of many interpreters. One of these was Kogyu Yoshio (1724-1800) and a copy of his portrait was acquired by Gentaku Otsuki out of his respect.